寄せ場での闘い　パート1

釜共・現斗時代

風間竜次

今日は第二回めの学習会ということで、現斗・釜共斗のたたかいについて、若干話していきたいと思います。

レジュメとして、年表と簡単な総括視点を用意しました。かなり急いでつくったもんで（別掲資料2参照）だいぶずさんなレジュメになってますけども、この二点を参考にしてやっていきたいと思います。

まず、年表のほうを先に見て下さい。現斗・釜共の前史ということで、一九六八年一〇月に結成された「山谷自立合同労組」（山自労）ですね。これは、梶大介さんなんかが中心になってまして、現在もあります。で、我々の現斗・釜共の前身としては、現斗・釜共時代の中心メンバーであった船本洲治氏や鈴木国男氏、それからいま広島におります中山さんとか、いわゆる広大グループが梶大介に造反をおこしまして、山自労書記局というのをつくったのが六八年の一二月です。

六九年に入りますと、釜ヶ崎のほうでは「全港湾建設支部西成分会」というのが結成されております。釜ヶ崎の労働運動としては、六一年の第一次釜ヶ崎大暴動の直後、「全日自労西成支部釜ヶ崎分会」かな、ちょっとこれは正確じゃないんですが、こういった組合が結成されていますけども、労働者に石を投げられたりしてすぐにつぶれています。それで本格的な労働組合としては、西成分会が釜ヶ崎においては最初であるわけです。山谷においては六八年以前にいろいろ労働組合が結成されるんですけれど、今回はそれはおきまして、このころ「東京日雇労働組合」（東日労）とか、前年に全港湾の山谷分会も結成されました。また、山自労書記局派広大グループが、六九年の七月には「全都統一労働組合」（全統労）というのを結成しています。これは山谷に限定せずに、もっと全都的に斗いをつくっていかなければいかんということで結成されたようです。実際、秋葉原のほうまで行って斗争支援をするというようなことをやっておりますが、これなんかについても、当時まだ全統労でやった部分がおりますので、総括をともにして行きたいと考えています。主要に僕は釜ヶ崎のほうにおったんで、釜ヶ崎のほうを中心として話して、あとは現斗時代おりました山さんなんかも来てるんで、山谷のほうについては補足してもらいたいと思ってます。

それで七〇年にはいりまして、一〇月一日に「愛隣」総合福祉センターというのがオープンするわけです。釜共斗それから現斗のたたかいを知る上で、当時、寄せ場はどういう状況にあったのか、そ

の背景を簡単に説明しておきたいと思います。

寄せ場は高度成長期に膨張しまして、特に山谷においては六四年のオリンピック工事の時期ですね。これがもっとも膨張していた時期であって、釜ヶ崎では七〇年の万博があった関係上、六〇年代の後半から非常に膨張してきて、正確な数はハッキリしないんですけども、二万人から三万人の労働者がおったようです。この時は、田中角栄の列島改造論というような時期で、七三年のオイルショックまでは仕事が多くあったわけです。あとで若干説明しますけども、七〇年から七二、三年というのは非常に暴動が多く起きた時期で、労働者は昼間は働いて、夜は暴動やって、また仕事に行くというようなパターンがとれたわけです。先程センターが七〇年の一〇月一日にオープンしたといいましたが、その暮れの一二月三〇日には(センターは三〇日にしまうわけですけども)年末年始に仕事をもってこいということで、詰所のストーブがひっくりかえされて燃やされております。その七〇年の暮れから七一年の初めにかけて、初めて第一回釜ヶ崎越冬斗争というのが行われました。これはかなり時期は短かくて、炊きだしを簡単にやった程度というふうに聞いております。

七一年の六月ごろからは、全港湾西成分会の若手の部分が中心になって押しかけ就労斗争というのが何件かあります。レジュメに書いたのでいいますと、六月に辰巳運輸斗争があります。これは夜勤に雇いに来たんですけど、雇うと約束した労働者を雇わなかったということで、数百名が辰巳の本社まで押しかけていって、行った者全員の休業保障、六割をとって帰ってくるというような斗いだったわけです。この斗いに対して警察がいろんないやがらせをしてきたので、抗議しようということで西成署前に押しかけたところ、数名を泥酔保護ということで引っぱりこんでリンチを加えたということに怒って暴動になっております。ちなみに私はこのころ、釜ヶ崎に登場しております。アルバイト気分だったんですけども……。辰巳運輸への就労斗争、九月の壷山建設の就労斗争、そのあとすぐ酔った労働者を神戸屋の店員がなぐった事件が起きまして、これに対して労働者が怒って神戸屋を焼き打ちにした暴動が起こりましたし、一〇月には福山鉄工斗争があります。これも一度雇うといっておきながら約束を反古にした手配師に対して、会社まで押しかけていくという斗争でした。これについては事後弾圧がありまして、「恐喝」ということで四名が逮捕されて三名が起訴されています。このへんは西成分会の若手の部分が中心になっておりました。

しかしながら、西成分会の出生の秘密といいますと――港湾の関係にこのころ非常に仕事が多かったわけです――全港湾大阪支部が大阪港でストライキをやった場合、釜ヶ崎からスト破りで動員されるという構造があったようで、これに対して釜ヶ崎でも組合活動をしなければダメだというようなかたちで、西成分会は結成されています。西成分会はやはり総評の体質が非常に強くて、特に福山鉄工の弾圧以降、こういった押しかけ就労斗争のようなことは駄目だ、同時に最初は行政斗争なんかで役人どもが要求をのまないと、「そんな答え方をしとったら、課長、夜、暴動になりまっせ」というような、まあ脅しとして暴動を評価しとったんですが、この頃になると暴動はダメなんだという言い方もしてきておりまして、当時、西成分会に参加していた若手の部分は反発をもっていました。組合会議で茶わんが飛ぶといったようなことも度々ありました。一方で、

西成分会の活動としては、センターが開設したときに、同時に職安が3階にできたのですけども、職安のやる仕事がない。まあ、釜ヶ崎にある職安というのは不思議な職安で、一度も職を紹介したことがないわけです。非常に人夫出しが多いので、違法業者を公的機関が紹介できないというのと、暴力支配の中でヤクザがからんでいるわけで、非常にいざこざが多い。これを職安として処理できないというところから、仕事は紹介しないで、その代わりに、当時としたら日雇失業保険ですね、これのアブレ賃の支給について職安がやるということで、西成分会なんかが中心になって詰めて、手帳の定着化、そのことが職安の主要な仕事になりました。これにからんで西成分会が労働者に手帳を取るような呼びかけを行っていったりしました。日雇手帳にはふつう印紙を貼らなければならないんですが、就労申告書といって、現場のオヤジのハンコがあれば、就労証明になって印紙代わりになる、というような行政斗争の成果も一定あったわけです。それはあったんですけれども、一方で七一年の秋ぐらいからですね、具体的に現場で労働者は支配されており、搾取されておる。また暴力団の現場支配がキツイということで、現場斗争――現場で労働者と共に斗う斗いが必要なのではないかということで、ボチボチこのころから現場斗争が提起されて、やり始めています。具体的には残業代をちゃんと払わせるとか、そういった斗いが、この頃は初期の段階としてやられています。

七一年一二月から七二年の一月にかけては、第二回の釜ヶ崎越冬斗争が行われまして、この時は大きなテントを借りてきて、そこで医者とか看護婦にも呼びかけて医療活動をやるとか、あるいは炊き出しですね。こういった形で、現在のような越冬斗争を定着させる斗争として行われております。

それで七二年の一月になりますと鈴木国男氏ですね。あとで説明しますけれども、七二年の二月一六日に大阪拘置所で虐殺されている男です。彼が山谷の事件で大阪に逃げてきておりまして、この時期に逮捕されました。東京に押送されて、彼はこのときちょっと症状が出ておりまして、裸になって徹底抗戦するわけですが、権力のほうは措置入院の攻撃に出て、陽和病院に措置入院させられるということがありました。それで鈴木氏の頭文字をとり、「S斗争支援共斗会議」というのが、関東と関西にできます。このS斗争支援共斗会議の提起としまして、あとで説明しますけれども、『裸族の旗』というパンフレットが出ています。

五月一日には、メーデーは七〇年から西成分会が行っていたわけですけれども、第三回釜ヶ崎メーデーが五月一日に行われまして、このとき二名が逮捕されます。これに対して西成署に抗議行動を起こそうという提起があったわけですけれども、西成分会の方の幹部が尻ごみするということがあって、それを突き上げて、それから西成署抗議行動が起こり、暴動に発展するということがありました。それで五月下旬ごろに、さっきいった船本氏なんかも釜ヶ崎に来ておりまして、彼なんかの山自労書記局派から全統労の斗いの総括と、七〇年からの釜ヶ崎の押しかけ就労斗争、現場斗争なりの、一定の総括と方針を斗わせる中で、やはり就労課程――労働現場を中心とする現場斗争が必要なのだ、それを斗争の要にしなければならないということで、五月の下旬ころから本格的に現場斗争を始めています。最初は賃金不払いの業者に対して賃金を要求するとか、あるいは暴力事件をかつて起こした業者の糾弾斗争を朝のセンターでやる

というような形で始めました。

五月二六日に、当時の釜ヶ崎の人夫出し業者の頭目として鈴木組というのがあったわけですが、この鈴木組のオヤジというのは、七〇年にセンターがオープンしたときに、人夫出しの親睦団体である「親睦会」の初代の会長で、同時に淡熊会系暴力団の分枝の鈴木組というのを仕切っておったオヤジです。非常にセンターあるいはオヤジの間でも幅をきかせていた頭目の一人でした。これに対して五月二六日、ターゲットをしぼって鈴木もやろうということで、マイクロバスに乗りこんで出かけていったわけです。ステッカーには現場は市内だということで行ったんですが、事務所に行ったら奈良へ行けということなんで、おかしいじゃないかと抗議をしたところ、「奈良市内とは書いてないじゃないか」といったのでもめて、若いのがゾロっと来て「お前ら何だ」と威圧してきた。その時は力関係から、まあ、とりあえず仕事に行こうということで一応仕事に行ったんですが、中には、一応現場の近くまで行ったんですけれども、こんなところで働けるかいと、トンコ――途中で帰ってしまうのをトンコというんですけれども――したメンバーもおりました。そのうちのメンバーの一人が、昼間トンコしてきたんで夜勤を探そうと、夕方、センターで仕事を探していたところ、鈴木組の若いのに拉致されて事務所に連れこまれてリンチされるという事件が五月二六日ありました。この人は今度の皇誠会―西戸組斗争で逮捕された橋野さんですけれども。で、五月二六日夜に橋野さんが顔をはらして僕らの溜り場に帰ってきて、これはもう許せないと、鈴木組糾弾斗争をやろうということで意志一致したわけです。次の二七日は雨が降ってたもんで来ないだろうと油断していたら、今度は他のメンバーが朝のセンターで車に拉致されて連れ去られそうになるという事件も起きまして、同時に二六日に鈴木組に行ったメンバーの家を、鈴木組が回ってドーカツして歩いているというようなことも伝わってきて、これは性根を入れてやらなければならないということで、対鈴木組斗争が五月二八日より行なわれます。

当日は二、三〇人集まって、まずセンターでマイク情宣を始めたのですが、これに対して鈴木のオヤジを先頭に四、五名がツルハシの柄とか木刀をもって殴りこんできました。しかしながら、こちらのメンバーの方が多かったし、すぐに鈴木組のオヤジをとりおさえて、センターの真中に連れだして徹底糾弾をして、オヤジを土下座さして謝罪させたということで、いったん引きあげたんですが、労働者の方はおさまらずに、鈴木が乗ってきた乗用車をセンター前で燃やして、その後五日間の暴動がありました。それまでかなりの数の暴動が釜ヶ崎でもあったんですが、この鈴木組以降の暴動は、「暴力手配師追放」というようなスローガンが明確になった暴動であったと同時に、それまでのさばっていた暴力団を軸とする朝のセンターの支配権がこれで変った、そういう意味では我々の寄せ場での斗いにとっては、画期的な斗いであったのが七二年五月二八日の対鈴木組斗争でした。

この斗争を経て六月三日には、「暴力手配師追放釜ヶ崎共斗会議」(略称、釜共斗)が結成されたわけです。当時、この釜共斗の中心メンバーは、六八年以降の学園斗争なり、七〇年安保斗争を担ってきたメンバーが多かったです。大きく分けると全港湾西成分会からぬけた部分。それとML派の潮流ですね、まあ、この当時はすでにつぶれておりますけれども。それと赤軍派系統ですね。ですから七

○年安保が一定終息して、地区へ入って労働者と結合して斗わなければならない、ということを志向した部分が中心でありました。それ以後はかなり労働者の部分が参加してきます。しかし六月二八日には鈴木組斗争の第一次弾圧がありまして七名が逮捕されています。七月四日には第二次弾圧がありまして、この鈴木組斗争では六名が起訴されて、約七年間にわたって裁判斗争が斗われました。

山谷の方も対鈴木組斗争とその弾圧があった時期に、釜共斗の斗いを孤立させないために山谷でも同質の斗いを始めようということで、斗いを始めています。八月一日には現場斗争委員会（現斗委）が結成されています。

釜のほうは、八月一三日から第一回釜ヶ崎夏祭りが行われます。このときのスローガンは、文学的というか何というか「我ら、まつろわぬ民、ここに自らをまつろむ」という、これは持永さんの提起なんですが。まあ、盆になっても故郷に帰れない、また釜においても俺たちの文化らしい文化は何もないということで、ひとつ、のど自慢とか盆踊りをやろうとか計画されています。夏祭りは例年三角公園というところでやるわけですけれども、ここには地元の暴力団がノミ行為をやったりですね、路上賭博をやっとるわけです。で、以前から映画等を三角公園でやろうとすると、当然、警察が来るわけで、ヤクザは路上賭博とかノミ行為ができないということで、いろいろ、いやがらせをやっていたんですけれども、夏祭りという形で四日間くらいやられたらヤクザの飯の食いあげだと、横山組と大日本正義団というのが中心となって、武装して襲撃してきました。これを撃退して夏祭りを防衛してやりぬくというのが、第一回夏祭りです。これは五月二八日に朝のセンターでの支配権をめぐる斗いとして勝利して、それに続いて地域のヤクザ支配との対決となったというのが第一回夏祭りです。

そして一〇月には飯場手配を中心とする手配師の親睦団体で「協力会」との斗いが一週間続きます。これは現場で暴力を振われたことに対する糾弾斗争をセンターでやっていたところ、「協力会」の手配師どもがゴルフクラブとか、あるいは日本刀もちらつかせて襲撃してきたのですが、逆に奴らのたまり場である喫茶店を襲ったり、センターでの手配を一週間にわたって完全に封じこめるという斗いとして行っています。最終的には「協力会」の頭目が謝罪文を書いて労働者の前で読みあげるということで完全勝利しています。ここにおいて、朝のセンターだけでなく、昼間そして夜の手配師支配、暴力支配を打ちやぶったという釜共斗の斗いが行われました。我々は、いま総括しても、この三つの斗いによって、暴力団―手配師が支配していたそれまでの釜ヶ崎を、労働者の力で転換したということが第一の成果としてあるのではないかと考えています。同時に、この時期は現斗委のほうも斗いを連続的に行うわけです。一方で、それまでも弾圧はあったんですが、一一月一五日の関西建設斗争あたりから権力の弾圧が非常に目的意識化して、釜共斗壊滅作戦に入ってきます。この関建斗争では、参加した三三名が全員逮捕されるという弾圧が行われております。

一二月に入ると、山谷の方が非常に煮つまって、一二月一二日のセンター前での攻防、翌三日の手配師に対する現斗委の反撃、これによって山谷でも労働者がセンターを制圧していくという斗いとして行われます。これに対して、浅草警察―マンモス交番による弾圧も行われております。同時に、いわゆる手配師―人夫出し業者が「八

日会」というのを結成して、現斗委対策を福祉センターの三階を使って練るということをやり、いわば官民一体となった斗いの圧殺・弾圧が行われていきます。この辺に関しては、山さんにもっと詳しく話してもらいたいと思います。

山谷が弾圧をくらってヤバイという状況をきいて、一二月一〇日には釜ヶ崎より約六〇名が山谷支援、というより山谷共斗ですね、山谷がピンチなので、この現斗委壊滅作戦を絶対に許さないということで六〇名が釜から来て、朝のセンター、そして夜も山谷を練り歩いて、敵の弾圧に対して労働者と共に斗いぬいています。釜共斗もこの時期が最大結集できた時期です。一二月一三日には山谷―釜ヶ崎連帯集会を行いまして、山谷―釜の連帯を強めていくというのが七二年の暮れです。

七二年暮れには、第三回釜ヶ崎越冬斗争が行われ、山谷では第一回山谷越冬が始まります。一二月二六日には釜の「愛隣」センターが爆破される事件が起っています。これの弾圧があとであるので、それはその時に述べます。

七三年に入って、二月一五日には、夏祭りに襲撃してきた、三角公園にシマをもつ横山組が我々の仲間二名を殴って重傷を負わせるという事件があって、横山組追放斗争が行われて、横山組の事務所をメチャメチャにして追放するという斗いがありました。次に三月になって大阪市土木局の差別発言に対する糾弾斗争（本当ならば今日映画をやる予定だったのが手違いでできなかったんですが）が四月にかけて行われています。これは大阪市土木局にアルバイトに行った中国人のRさんに対して、局の職員が「山谷や釜ヶ崎のアンコはなまけ者だから、タコ部屋へでもぶちこまなければ働かない」とか「日本のためだったら朝鮮人・中国人は殺してもかまわない」というような発言を行った。これを糾弾するということで、当時西成地区にあった「関西徐さん支援連絡会議」（徐支連）と共斗して斗われました。徐支連というのは、徐さんという中国人の保母さんが勤めていた保育所が、私立から大阪市立の保育所になるときに、国籍条項で解雇されるという事件があって、これに対する大阪市糾弾、首切り反対ということで結成された組織です。ちなみに徐さんはこの斗いにより国籍条項が徹廃されたことにより職場復帰しています。この斗いが四月六日、大阪市土木局に謝罪させるという形で斗われております。

このころになると斗いも惰性的になって、釜のほうは五月メーデー、八月夏祭り、年末には越冬斗争をやるというスケジュールがパターン化してくることになります。その間、六月には山岡建設斗争といって、これは京都の業者なんですけれども、これが水も何も用意しないで、「水が飲みたい」と労働者がいうと、「泥水でも何でも飲んどけ」というふうな非常に悪どいことをやっていて、これの発注先が京都市であったことから、京都市糾弾斗争でハンストをやって排除されたりしました。いったん大衆団交を勝ち取ったけれども、二回目から京都市がトンズラするといったことで、最終的な勝利は勝ちとれなかったけれども、山岡建設斗争という、まあ初めてハンストという戦術もとりいれて行われました。この時期、山谷の方では、新井技建斗争が高田の馬場で斗われております。詳しくは山さんに話してもらいたいんですが、新井技建というのは、関東では有数のタコ部屋―刑務所飯場といわれたところで、トンコした労働者をリンチして殺すとかいうような事件を起したとこです。これ

に対して現斗委が高田の馬場へも進出して、これをやっつけるという斗い――これは他の寄せ場への進撃ということでは画期的な斗いの一つであります。

七三年の暮れに石油ショックがあって、この頃から非常に寄せ場に仕事がなくなってきます。第四回釜ヶ崎越冬斗争では府庁前で、主要には仕事よこせを中心的な要求としてハンストを行ったり、越冬に入ってからは、大阪市が用意した無料宿泊所、別名収容所ですけれども、これの斗いと、テント村――このころは釜も公園が使えて、テントをいっぱい集めてきて、さながら難民村、難民キャンプのような様相を呈していました。ですからテント村での炊き出し、医療、パトロールを中心とした斗いと、収容所においての待遇改善なり期日延長の斗いなりと結合した斗いをやっています。

七四年に入り三月になって、七二年一二月二六日に起った「愛隣」センター爆破のデッチ上げ弾圧が行われます。三名が逮捕されて一名が指名手配という弾圧がありました。このうち二名が起訴、一名が少年であるということで釈放されたんですが、権力にしゃべらされたことを後悔して自殺しておりますし、手配された一名は船本洲治氏で、彼は七五年六月二五日、皇太子来沖に抗議して沖縄の嘉手納基地第二ゲート前で焼身決起をしています。ですから我々にとって、この「愛隣」センター爆破デッチ上げは、非常に大きなダメジを受けた弾圧であったわけです。

五月一日、大阪のメーデーは大阪公園で行われるわけですが、このときは演壇占拠をしたというようなメーデーでした。六月にはセンター爆破デッチ上げ粉砕集会を開きました。このころから、かなり路線的な行きづまりもあるし、一方では非常に仕事が少くなってくるといった状況で、釜共のメンバーのうち三名くらいが中心になって、「仕事よこせ期成同盟」といったものも一〇月に結成され、これが七六年に「釜ヶ崎日雇労働組合」（釜日労）の前身になっています。路線論争というまでは煮つまらなかったんですが、このころ行政斗争か、あるいは現場斗争かということで、内部的に論争も斗わされて、かなり分裂状況に入ってきているという時期でもあります。この辺は現場斗争の意義と限界も含めて、また後で話したいと思います。

年表を追っての説明は以上のようなところです。今度はレジュメについて、釜共・現斗の「前史」としての全統労（「全都統一労働組合」）時代は、戦斗的な行政斗争を中心としてやっていたようです。同時に、書いたものを読むとかなり大言壮語も入っていて、ドヤ占拠から地区ソヴィエトをつくるのだというようなことをいっとります。まあ、この辺は今でも体質としてあるんですけれどもね、大言壮語やりっぱなしは……。その中でも以後に続くものとしては、現場斗争は具体的にはほとんどあまりやられてないみたいなんですけれども、現場斗争の提起が行われておりますし、同時に全統労ということでは、全都を射程に入れているということが、後に続く問題としては重要な提起になっていると思います。

次に「準備期」としては、鈴木国男氏が七二年に措置入院させられたときに、「S斗争支援共斗会議」（S支共）がつくられているわけですが、先ほどもいった通り、この中で『裸族の旗』というパンフが出ています。これは、個別Sは山谷・釜ヶ崎に代表される労働者の、いわば階級矛盾＝抑圧を背負わされた労働者の一つの表われ、狂気としての表われであり、個別Sの問題にとどまらずに、も

っと寄せ場―下層社会全体の問題として、鈴木国男氏の問題もとりあげるべきだというような問題提起です。狂気というのは階級矛盾＝抑圧に対する現状打破のエネルギーであること、これは多かれ少なかれ、厳しく抑圧されている下層社会―寄せ場労働者においては、様々な形で、例えば狂気という形でレッテルをはられて表われてきている。そのような位置付けから、もっと寄せ場における抑圧を分析し、このときに、いわゆる市民社会と区別されたものとして寄せ場があるんだというような、市民社会と非市民社会論というのが出てきています。これにはかなり限界があるわけなんだけれども、寄せ場も市民社会の一部を形成しているわけで、寄せ場を個別にとりだして非市民社会であるということは、理論的な誤りであり、日雇全協ができる以前の総括では、下層主義とか、寄せ場主義とかが派生する一つの要因になっていると総括しています。しかしながら、積極面としては、寄せ場労働者というのは凝縮された階級矛盾、階級苦を背負わされている存在であり、ここに労働者本来の苦悩と姿がある。また、同時に現状を打破するエネルギーがあるということを前面につき出したということでは、非常に大きな意味をもっていると思います。特にそれまでの運動の中では、暴動が寄せ場労働者の主要な斗いの形になっていたので、反乱を組織して、さらにその反乱が反乱を組織するような斗いが必要なんだということが提起されていますし、このとき、流動的下層労働者規定というのが出ています。これは釜ヶ崎・山谷労働者といっても、そこにずっと住んでる人はまれにしかいなくて、仕事を求めて飯場に行ったり、社外工あるいは臨時工として住みついたり、あるいは全国の飯場―寄せ場を流動して歩くといったことから、流動性―流動的下層労働者といったことが出てきたんですけれども、この流動性を武器として組織化をすることが重要であるという問題提起がなされています。それは、流動性といったことを武器とすることでどういった利点があるかというと、当時主張されたのは、定着しないことによって警察権力によって実態をつかまれにくいということ。二番目として、家族・財産・職場など、守るべき何ものも持たされていないため、いつでもどこでも自由に斗争できる条件があると。三番目には、日本資本主義が労務管理の形式として寄せ場の形態を全国的に形成するため、この労働者は全国の寄せ場を渡り歩き、全国的規模の斗争を展開できる、この条件を武器として組織化されなければならないという問題提起がなされています。

それから、それまでの寄せ場の運動の総括として、第一期というのは、悲惨と貧困の宣伝――これは文化人が中心になったり、釜ヶ崎でいうと警察が「裸の会」というのを組織してやったような時期です。こんなにも不幸な人々がいるのにあなた方のみが幸福でよいのか、というようなことで悲惨と貧困を売りものにして、手をさしのべて下さいとボランティアをつのるといった救済的な斗いとしてあったようです。斗いというのか、運動ですね。第二期としては右翼組合主義として位置付けられ、アメ玉をくれないので暴動が起きるのだ、暴動を起さないためにはアメ玉が必要です、と言うような主張です。山谷においては「山谷労働者協力会」（山労協）とか、それを継承して「山谷地域労働組合」（山労組）といったようなのができています。この辺の運動の歴史はまたの機会にゆずった方がいいと思います。第三期としては左翼組合主義。アメ玉をくれなければ暴動を起すぞ、アメ玉を出せという主張ですね。これは山自労

とか、西成分会の初期の行政斗争ではこういうことがいわれておりました。

第四期を創出しなければならないというのが大体『裸族の旗』の主張で、この辺の主張が主要には現場斗争と暴動との結合として、釜共と現斗委の理論的基礎として提起されました。本史では特に現場斗争が中心だったんですが、これは位置づけとしては、個別資本との実力対決を通して総資本と対決する勢力を形成するのだということで、具体的には朝の寄せ場をめぐる支配と非支配の関係を逆転させる運動とすること、二番目には人民の海・根拠地形成を目ざすというようなことを前面に出して、労働者が自らの力に確信をもち、権力意識に目ざめることが必要だ、この斗争が現場斗争だという位置付けがあったわけです。当時あまり労働運動という意識がなくて、釜ヶ崎、あるいは寄せ場労働者が解放されるには革命しかない、革命斗争の根拠地として寄せ場で斗うんだという意識がかなり強かったんです。この辺については、六〇年代後半から七〇年の初めにかけては、いろんなところが明日にでも革命が起きるようなことをいってたわけで、まあ、その辺の延長線上にありますが――。

戦術としては〝ケタオチ現場でガタクロう〟というのがありました。大体、朝センターに来る手配師や人夫出しは、いいかげんなことをいって連れていくわけで、片付けだといっておきながらスコップ持たして穴を掘らせるとか、全く条件が違うというようなことはザラにあるわけです。その中でも特に悪どいとこを狙いうちしようと、これがスローガンになっています。具体的には、中心は朝の寄せ場――これは労働者が非常に多いんで我々には有利な場なわけですから、この有利な場において手配師、オヤジをつるしあげる。「昨日はなんだ、条件ちがったじゃないか、片付けじゃなくてネギリ(関東じゃネギリいいまして、大阪では掘り方といいますが)やらしたじゃないか、その分の差額を出せ」とか、あるいはトンコしてきた場合には、朝センターで賃金を要求するというような形です。二番目には、大方の手配師や人夫出しがヤクザとの関係があって、現場で労働者を暴力支配するので、ヤクザとの対決を射程に入れる。で、斗えば当然権力が弾圧してくるんで、これを広汎な団結で封じこめていかねばならない。三番目には、道理あるやり方で斗い、斗う仲間うちの育成をはかり、広汎に同調者をつくり出していく。この基本にあるのは、労働条件は労働者が決めるんだという姿勢と思想ですね、これを軸としていうがままにこき使われることを拒否する。具体的に現場でどうするかというと、力関係が不利な場合には、やるべきことをやって文句をいう。次にこれは消極的な方法ですが、トンコする。しかし、その場合でも、条件違反だった場合には次の朝、センターで賃金要求する。さらには徹底的にサボル。スコップを渡されたら、スコップにチョコっとのせてチンタラチンタラやる。文句をいったら「このくらいの仕事量位の賃金しかもらっとらんわい」とか、いろんな戦術を駆使するわけですが、基本は現場で仲間と労働し、仲間をつくっていくということです。現場で形勢が不利な場合は、有利な場である朝のセンターに持ち帰り、労働者が圧倒的有利な状況の下で、要求をかちとり支配権の転換をはかっていく。そういう回路をつくった中で仲間をつくり、力をつけていくという斗いが現場斗争としてあったわけです。現場斗争も初めからそうスンナリと行けたわけではなくて、俺なんかも七二年の二月ごろ、現場斗争を始めたころには、釜ヶ崎から行くと大体四時半に上がるの

が常識なんだけれども、ある現場の監督が五時までやれというので、それを拒否したところ、ケンカになって、監督三人に押えつけられてスコップでしこたま尻を叩かれる、ということがありました。

鈴木組斗争を契機とした力関係の転換によって、業者―暴力団を中心とする手配師・人夫出しも一定、柔軟な路線に転換してくるという形になったわけですけれども、彼らの戦術としては、釜共斗なり活動家と目される者はまず雇わない。また現場に行けた場合でも、労働者とは分断して活動家には金をサッと払って帰させるとか。あるいは小回りといって一、二時間でやれる仕事をパッと与えて帰すとかという形で、このころから現場斗争に対しても権力の弾圧とともに、手配師・業者側からも、労働者と分断していく方針をとってくる。あるいは就労から干すという形で対抗してくるわけです。当時、釜共・現斗時代は飯場斗争としての位置付けは弱くて、山谷の新井技建斗争なんかを契機にいわゆる刑務所飯場やタコ部屋を叩かなければならないという問題意識はあったんですけれども、具体的に飯場制度＝労務供給体制を打っていくという形にまでは斗いが方針化されませんでした。釜なんかでは、タコ部屋があるから救出してくれという訴えがあった場合は、明け方、乗りこんで労働者を救出するとともに、暴力ボーシンなどをやっつけて帰ってくるとか、そういうのはあったんですけれども、飯場斗争を方針化するという点では具体化せずに、これは釜日労の七〇年代後半から大阪では「釜日労争議団」、山谷の三者共斗から「山谷争議団」という形で、半タコ―ケタオチ戦として八〇年代に入ってから方針化されます。

当時、現斗・釜共時代、もう一方の斗いの柱として暴動には非常な想いがありました。事実、寄せ場労働者が自己の抑圧された状況を突破せんとするエネルギーをもって起ちあがる決起のすばらしさは、暴動であったんではないかと今でも僕なんかは思うわけですけれども。当時はかなり思いこみがありまして、寄せ場暴動の全国的な拡大によって革命斗争は勝利するのだというような、まあ、短絡した言い方ですけれどもね、暴動から都市人民戦争を斗うのだというような提起もなされていました。釜共の内部でもこれについてはいろんな考えをもってる人がいましたが、これが釜共の方針であったとは必ずしもいえないわけですが……。そういった暴動の平面的拡大が必要なんだという問題意識で、全国の寄せ場調査は一応やってるわけです。広島へ行ったり、博多へ行ったり、北九州へ行ったり、東北の方はあまり行ってないんですけども。山谷のほうでは高田馬場とか寿とか。しかし、なかなか山谷・釜のような方式ではすぐさま斗えないということで、この暴動の平面的拡大路線というのは破綻していくわけです。

最後に簡単にしますが、寄せ場の斗いの位置と総括ということで非常に不充分なんですが、戦前から戦後の、主要には寄せ場―下層労働者の斗いとして羅列的にピックアップしています。

戦前は「在日朝鮮労働総同盟」とか、あるいは「関東自由」「全協土建」などに組織された労働者、特に朝鮮人労働者の斗いが日本の労働者の先頭に立った斗いとしてありました。我々は「日雇全協」――全協というのは「全協土建」の斗いを継承して発展させていくんだという想いがあるわけですけれども、この辺は我々も充分学習してないし、またの機会にゆずったほうがいいと思います。

戦後は敗戦直後の朝鮮人・中国人を中心とする鉱山などの斗い、職よこせ斗争とか――。一方では生産管理斗争とか生産再開斗争なん

かあったんですけれども、圧倒的な失業者の中で、職よこせ斗争なんかも敗戦直後かなり盛り上がってますし、朝鮮戦争時になりますと祖防隊（「祖国防衛隊」）で『新朝鮮』という機関紙があるんですが、ここには朝鮮戦争に対する反戦斗争と祖防隊への組織と同時に、そこにオルグするために飯場なりへオルグが回って現場で斗うというような斗いの記録も『新朝鮮』（セイチョソン）に載っています。こういうのもまたの機会に――。

こうやって戦前から戦後においては、かなり日雇いなり下層労働者の斗いは階級斗争の前面にあったんですけれども、いわゆる五五年体制以後は、そういった労働運動の表舞台からは消え去ります。これには一つは民間の路線の下に切り捨てられたという側面と、下層労働者のもっているラディカルな斗いを包摂するような運動なり、組織がなくなってしまったからと考えています。六〇年代には、三井三池斗争とか六〇年安保がありましたが、山谷でも釜でも「血の叫び」として誰に指導されることもなく、何回となく暴動が起ってるわけです。六〇年の後半から七〇年の初まりにおいては、学園斗争から反戦反安保斗争があって、歴史的にみれば寄せ場の斗いもこういった歴史性をもった斗いとしてあるんだということをふまえて、我々は斗わなければならないんじゃないかということでレジュメに列挙したわけです。

次も簡単になりますが、国家・資本の労働力政策として、戦前の強制連行を含む総動員体制、それから産業報国会という形で戦前はありますし、労務報国会――これは本を読みますと山谷にもその支部があったみたいですね――そういった形で侵略戦争にも動員されていった体制がありました。戦後においては簡単に政策をみれば、失業に対して失対を出すといったことから、朝鮮戦争を契機として復活した日本資本主義は高度成長期に入り、日韓条約を契機に帝国主義として復活していきます。この高度成長期から次の日本列島改造論あたりまでが、中卒者が金の卵といわれた時期を経て非常に労働力が再編成されて、農村漁村山村が解体され、あるいはエネルギー転換によって鉱山が閉鎖されて、そういった労働者―農民、漁民が都市に安価な労働力として集中されるという過程の中で、寄せ場も膨張していきます。ところが七三年暮れのオイルショック以降、寄せ場には極端に仕事がなくなって、現在、長期のアブレ地獄が続いているというのが現状です。寄せ場の形成を簡単にいいますと、高度成長期以前はスラム街としてあって、いわば貧民が家族で住んでいるという状況だったようですが、高度成長期を契機に膨張し、労働力市場としての様相を呈して、単身の男の労働者の集中する場になっていくというのがオイルショック以前までです。それ以後は仕事がなくなったのが主要な理由なんですが、若者がほとんど入ってこなくて労働者が高令化し、疲弊化されてきているということが現在言えると思います。国家・行政・資本の対策としては、一貫して治安対策、特に暴動対策としてすすんできているし、同時に民間の業者、特に地区の商店主なりと連合して、例えば釜の方では「愛隣」対策協議会とか、「愛隣」クリーン作戦推進協議会という形で、治安対策あるいは保安処分的な対策を労働者に対して押し進めてきている現状があります。

現斗・釜共の斗いを最後に簡単にまとめると、寄せ場の労働者というのは、抑圧された状況に規定され、そこからのラディカル性は物事を根本からつかみ出せる位置にあるのだということ。寄せ場に

おいては帝国主義支配の赤裸々な姿があるし、それは何よりも暴力支配であるし、同時に社会的な矛盾のるつぼとして、被差別部落民、あるいは在日朝鮮人、「障害者」、ウチナンチュー、そういった被差別大衆ですね、差別のゆえに寄せ場に流れこんでくる労働者も非常に多いわけです。そういった帝国主義の赤裸々な姿としての労働者支配、これと対決していくんだということが釜共・現斗の時代から鮮明にありました。特別の不正ではなくて、不正そのものを蒙っている存在であるとか何とかは、マルクスが『ヘーゲル法哲学批判序説』だかなんかでプロレタリアとはこういうものだといっているわけですが、それは、いかなる特別な不正でもなく、ズバリ不正そのものを蒙る階級、制度の諸帰結に一面的に対立しているのではなくて、その諸前提に全面的に対立している階級、人間の全き喪失であり、それゆえにただ人間の全き取りもどしによってのみ己れ自身を獲得しうる階級――ま、これがプロレタリアートであるといっているわけです。寄せ場労働者ってのは、これそのものではないか、そういった存在に規定されて、現状打破の革命性・階級性を持ってるんだということを強く打ち出したことに、釜共・現斗の意義があると思いますし、同時に労働者性、それに戦斗性、大衆性を獲得できたと、これは五五年体制以後の既成の労働運動、組合主義の枠内でしか斗わない労働運動の枠を一歩越える斗いとして評価できるのではないかと考えています。

もう一つ、これは不充分にしか展開されなかったんですが、国際主義の問題として『釜ヶ崎反入管通信』が七三年に出されていて、これ以後、非常に不充分だったんだけども、我々寄せ場労働者は、「第三世界」人民と非常に近い境遇にある、だから第三世界人民と連帯しなくてはならないんだということも、問題意識として持っておりました。この辺の不充分さをどう克服していくかということは、今後の課題になると思います。

あと、書き忘れたんですが、現場斗争を軸としながら、夏祭りとか越冬斗争――越冬斗争においてはメシの問題から病気のことから便所の問題から……すべて我々は準備しなければならないんだという総力戦の位置付けの下にやってますし、一方で「釜ヶ崎医療を考える会」とか「釜ヶ崎救援会」といったようなものもつくられております。山谷の方でも「山谷救援会」というのも当時ありました。そういった総力戦体制の下に、我々は寄せ場から起ちあがるんだという問題意識が非常に鮮明だったわけです。

限界点としては、簡単にしか書いてありませんが、一つは市民社会と寄せ場を対置して寄せ場＝非市民社会であるという発想法から階層性の固定化――自らの階級性は充分、主張してしかるべきなんだけれども、他の階層に対しては、全く無視かあるいは寄せ場の斗いの支援の対象でしか考えなかった点など、階級全体の観点をもつことに不充分性があったんではないか、と今は考えています。一つには全体状況の中で労働運動が総評・民同に牛耳られている中で、やむをえないといえばやむをえないんだけれども、こういった視点のあやまりから孤立化を招いてしまったという現状があったと思います。現斗・釜共解体の要素としては、一方では集中的な権力の弾圧があり、釜ヶ崎だけでも七二、七三、七四年と延べ二〇〇人ぐらいが逮捕されて、一〇〇人ぐらいが起訴されています。他方では、主体の飛躍の契機の創出ですね。これは釜共というのは、暴力手配師追放という行動スローガンで共斗会議をつくって、それを団結の

軸とするということで結集していて、これが一定、成果をおさめた段階で、次にじゃあ、どう方針化して次の斗いを準備していくのかということが明確にされず、同時に政治路線が明確に提起できなかったというところで、内部分裂と弾圧、一方で中心メンバーが死んでいくといった中で解体していくという状況だったわけです。一般的にいえば、現場斗争の前進と成果をふまえて、次にどういった運動論をもってくるのか、といったことがあるし、一方で流動性を武器とするといったところでさっき何点かあげましたが、これは斗いが前進している段階では力を発揮するんですけれども、逆に停滞期には分散状況を呈してしまって、組織はガタガタになるという弱点をもっています。その辺は、今後の日雇全協の斗いにおいても、どういった運動をつくり、どういった組織をつくるんだといった意味でも、今でもひきずっている問題です。

以上、まとまりがなく申し訳なかったんですが、この辺で一応、問題提起としておきます。

司会　どうもありがとうございました。前回の学習会に続きまして、今回は六〇年代後半から七〇年代前半において斗われた、一定の階級の昂揚の中で、釜ヶ崎と山谷で展開された寄せ場の斗い、それの詳しい報告と総括ですね、こういったものを受けてきたと思います。この中で質問などあると思いますので出して頂きたいと思います。

Q1　あの、質問したいんですが、寄せ場において、昂揚期と停滞期のサイクルっていうか、これどういうパターンっていうか、どういう流れで来ているかっていうことをおききしたいんですが？

風間氏　エートね、六〇年代初め、六〇年に山谷暴動が起って、釜ヶ崎は六一年に大暴動がありました。釜の場合は、交通事故でひき殺された労働者が、まだ息があるのに、警官がムシロをかぶせて放置したということに怒って起っています。あとパチンコ屋の店員がなぐったり、商店主が労働者をなぐったり、そういうことを契機にして何回も暴動が起ってるわけです。六〇年代後半に、さっき述べたように労働組合が寄せ場にできて、釜でいえば七一年から七二年にのぼりつめます。山谷はサイクルがちょっと遅いんですけれどもね。で、七三年後半、特にオイルショック以降、仕事がなくなったという面も非常に大きな要素なんですけれどもずっと停滞期があって……。七九年ぐらいから、また釜ヶ崎においては飯場斗争が行われたり、あるいは八〇年に入って春期斗争、それから半タコの飯場に対する斗いなんかの昂揚があります。同時に、停滞期ではあるんだけれども、寿とか笹島にも労働組合ができて、それが八〇年代に入って全国的な斗いとなっていく。そこに、八一年九月くらいに全国寄せ場交流会というのができて再び昂揚期を迎え、日雇全協が八二年六月二七日に結成されるわけです。それ以後またちょっと停迷して、再び西戸組＝皇誠会斗争で昂揚期を迎えている。まあ、大体そんなところです。

司会　質問者の方、意図のほうは十分、伝わってますでしょうか。

Q1　はい。

宗さん　あの、一つの試論なんですけれどね、これは去年、山さんと話をしていて出てきたんだけど、もっと広い意味でね、敗戦後しかわからないんだけれども、寄せ場というふうに限定できないんだけれども、朝鮮戦争ぐらいまでが職よこせというような斗いで、いわゆる日雇＝下層の運動が盛りあがっていく。で、ま、職安斗争じゃないかと。で、そのあとが高度成長経済時代で、暴動の時代。その暴動に表われた労働者の積極性を現場斗争に編みあげるまでに至る。そのあと石油恐慌のあとはいろいろポチポチとあったけれども、衰退期あるいは停滞期という。七九年の磯江さんのマンモス・ポリ公殲滅戦、それから爆取弾圧、あるいは山谷なり釜でのいろいろな弾圧をきっかけにだんだん、また盛り返してくる。そういうような一つの仮説をね、立てたことは、短期的にいえば上がったり下がったりすることはよくありますけれども、総体的に見ればもう一つの昂揚を作れる時代にあるといえる。そのとば口に来ているといえると思います。そういう一つの仮説も成り立つのではないか、というふうに思います。

ギャー　僕はいま祭りを考えているんだけれど。自分らの根っこみたいなサ、労働者が労働者として胸の内を晴らせるみたいな祭。労働者がただ労働者として使われるだけみたいな、道具としての自己じゃなくて。この前の侵略戦争なんか、労働者が戦争の力になったわけなんだけど、いまやっぱり、略奪をやめさせる力なんかを、基本的な根っこの力をつむぎ出すことが必要だと思う。そういうことを、いま、すべきなんじゃないか。これは今回の留置場暮らしの中で考えたことだけど。

風間氏　オイルショック以降、衰退期を迎えたっていうのは、高度成長のときは、もろ、暴力支配とか低賃金とか、それを獲得する目的とかがはっきりしていたと思うんです。そしてここまでやれば、我々の方から攻めていったら、獲得するものがあるなということがあったと思うんだけど。必ずしも寄せ場に限らず、ごく一般の社会的な運動現場でもそうだと思うんだけど。それが低成長というかオイルショック以降に、高度成長が望めない、賃金も上がらないとなると、いままでの生活を守るというか、獲得する目的みたいなものが実際見えなくなってくると、その辺から沈んでいったというか……。それが今、彼のいったように、じゃあ我我はいま何を起すかといったら、必ずしも向うからの攻撃に対して何かを要求するといったことではなくて、力をつくっていくというか……。そこで、生活のレベルから自分自身を変えながら、両方の敵と斗っていく力を作っていくというか……。それはその食い物のところから考えていくとか文化を創っていくとか、その辺でこれからのやり方の広がりと戦略をつくっていく契機があると思う。向うの抑圧みたいなものからは守っていくという。逆に暴力手配師たちも危機を感じているから、何とかして支配権を手に入れようとして去年の西戸組のように出てくるんだけど、それを守るべき組織作りというか、それは考えていかなくちゃならないと思います。

ギャー　この間竜さんから差し入れてもらったレーニンの『何をなすべきか』だけど、彼はあの時代にね、組織っていうのをつくり上げていくとき、一つの手段としてね、全国的な新聞を一つの手段としたわけ。僕ら今の時代に、それに代わるもので、そのもので情報をバッチリ交換できて、本当に一人一人が少くともその場で伝達できるお互いの情報交換をしていけるものは何かなと思ったとき、僕の経験では、それは祭りというのはすごく力になる。労働者だけでなく各地で斗っている人も、日常の成果みたいなものを交換する。何しろ、それぞれの斗いの成果をその場で発表し交換しあって、祭りは一つの目的であって祭りですごく昂揚感を生み出したらそれは暴動になって、それからそれぞれの生活の現場に帰って一生けんめいやればいいと思う。例えば山谷とか現場――いつも敵と向いあってる現場であるわけだけど、そこで一つの祭りを確保できたならば、力強いものとして残るんじゃないかと思うわけ。いわば階級的労働運動の視点から祭りを位置づけてみたいのです。

ゲイリー　やっぱり斗いっていうのは祭りのようにバーッともりあがって終るというものじゃなしに……。

ギャー　いや、そういうんじゃなく、斗いが停滞しているときだって祭りはうてるしサ、もっとものすごく盛りあがってるときだって……。

ゲイリー　いや、斗いの中にはそういう祭りのような楽しいことばっかしじゃなしに……。

ギャー　いや祭りって……。

（ヤジ）聞くべし、よ！（笑）

風間氏　あらゆる領域の斗いは必要だと思うんだけど、やっぱりあくまで俺らが十二年間斗ってきた基本というのは、敵の攻撃・抑圧に対して、斗えば勝てるんだという労働者自らの力に確信をもって、それを基礎にしていろんな領域をやらないと難しいんじゃないか、というのがあるけどね。

ギャー　僕は今年の越冬一回しかやったことないんだけどサ、何か支援、当該、労働者っていう三者が分離してるっていうか、しっくりいってないっていうか、それぞれがそれぞれに遠慮してやってて……。僕はそこをもうチョイお祭り気分でサ。……僕は今回の越冬は参加者になっていたから、主催者って意識なくて失敗したなって思ってるけど、それでももうチョイ打ちとけあって、そういうふうに規定された中でも、もうチョットできるんじゃないかなと思うんだ。越冬なんていつも重苦しいところがあって…。

山さん　ま、ギャーのいってる祭はその場かぎりの祭りであってサ、それを作り出していくにはものすごいパワーがいる。それがいまは現に抑えこまれているわけじゃない。だからどっちを向いてパワーを引き出すかっていうのが、俺らの戦術だったわけ。そ

れが六〇年代の暴動と現場斗争を結んでいって、そのときにパワーを引き出していくと。少くともあの当時の越冬は労働者と組織と支援が分断されているんじゃなくて、もっと山谷の情勢というのは何が起るかわからない状態にあった。そういう力っていうのをどう引き出せるかっていうこと。その力がないときに引き出せるかっていうのがやっぱりいちばん大切だと思う。

（ヤジ）寄せ場の討論会！（笑）

司会　今日は三多摩での学習会です（笑）。エー、祭りをめぐる問題ってのは、前回の講演の最後の方でも、敵権力の治安戦略の一環として、向うからのカンパニアの一つとしての祭りなんて話も出てましたので……。ま、今後のことの一つとしてきちんと話し合われる必要があるかと思いますが、時間的な制約がありますので、他に質問のある方を優先させたいと思うのですが……。ま、祭り論争をもうちょっと発展させたい方もいるとは思いますが。

Q2　年表の七一年一一月の『労働者語録』、これはどういったものですか。

山さん　これを作ったのは労働者が自分で現場に行って自分で斗える指針になるものを作ろうじゃないかっていうのが、これを作った契機です。で、その前に、流れとしては全統労とか東日労が作ったけれども、ほとんどが行政斗争を軸に置いていて、労働者が自分が現に搾取されている労働現場で斗いを組んでいくという方針が出しきれなかったので、これは何とか作らなきゃならんということでこれを作ったんです。こういう形で定式化してビラにも書き、現場に行ったら必ず一〇時には一服をとって、昼には一一時半にはきっちり上がって、一時まで休むとか、きっちり残業をもらうとか、ケタオチの仕事にはケタオチの労働で報いるとか、そういうのをきっちりとやること。ところが、これがものすごく浸透したわけね。そしたら何が起ったかっていうと、あまり働きたくないけど金はもうけたいというグループが続々と出てきて、現場に行って何をやるかっていったら、すみっこに行って棒で叩いてるわけね。そして足とかを脹らして、上から物が落ちてきたとかいって金をもって帰ってきて、もう行くなりすぐ帰ってきて、皆で宴会やるとか。そして釜で最初のころそういうグループがはびこって、それとの内部斗争がずいぶんあった。最後のほうは現斗と釜共が解体していくころに問題になったのは、それがちょっと大きな問題だった。作風問題。要するに誰の利益のために斗うかっていうのがちょっと忘れられて、例えば山谷でいえば現斗のほかにいっぱい労働者グループができるんだけど、それが勝手に現斗を名乗ってバンバン現場斗争やって金ふんだくるっていう、それがものすごい勢いでやってるっていう……。だけどああいう状況ってのは今考えると非常に面白いし、ちょっと出てもらいたいな（笑）。今、やっぱり労働者は覇気がないでしょ。覇気がないってのはやっぱし……。

風間氏　そうだな、最初は、やりすぎはいいことだなんていってバンバンやってたんだけど、だんだんそれが斗争の障害物になっ

てきて、内部で大分論争になったことがあったな。

山さん　もう、ひどいんだよ。船舶なんか仕事に行くでしょ、すると監督が「オイコラ」なんて朝言うでしょ、そうするともうそれでケンカやって帰ってきちゃうんだ。俺には名前があるのにオイコラとは何だっていって。ああいうことができた時代って……。そういう覇気みたいなものを、もう一度、山谷でも奪い返していかなきゃならないなと思う。で、それがいま奪い返せる場所は飯場じゃないかなって気がしている。一挙にはいかないと思うけど。で、職人が職人として仕事ができる元気な人は、他に仕事がないということで押えつけられている状況をもうちょっと突破するということがないと、山谷が窮乏化してきたら、その窮乏化した人と、元気な人たちとの分断がただ深まるだけになるから、元気な人をとにかく徹底的に斗わせて、困っている人を助けるという構造をつくり出していかなくちゃならないんじゃないかな。

司会　えー、こうやって振り返ってみると、寄せ場における斗いっていうのも、どこにおける斗いも同じだっていうか、皆さんがそれぞれ斗争を抱えてらして、まあ、元気にがんばっている所もあるだろうし、いま一定の壁にぶちあたっている所もあるだろうけど、その辺との関連ていうのか、同じようなことが見えていると思うんですよね。で、自分たちとの斗いと引きつけたところの質問、ないですか？　いま元気一杯にやってる都病院（現、北久米川病院）なんかどうですか？

Q3　急にいわれても……。あの壁というか、今、勝利目前にして足踏みしている状態なので……。いま勝利が見えていると何とかなるだろうということで、なかなか意気があがらないんだけど、それぐらいキツイっていうことを、当面の目標というか、どこに力を入れるかっていうことが、なかなか形では行かない状態なんだけど。

司会　他に質問とか、今後討論したいという提起とかありませんか？

Q4　あの、チラっときいたんですけれど、以前の寄せ場は釜ヶ崎の他にあって、天皇が通るときにそこを通るから、釜ヶ崎に集められたというようなことをきいたのですが――。

風間氏　明治時代は、今の電機街になっている日本橋の方にですね、いわゆるスラムがあったんです。明治四〇年代に、第五回勧業博覧会が天王寺公園であって、この博覧会ってのが非常に問題ある博覧会で、人類館ってのが作られたんですね、ここにアイヌ人とかウチナンチューとか、朝鮮・台湾人とかをオリに閉じこめて人類館という形でやることになった。これにはすごい糾弾が起りまして、できなかった。アイヌはやられたのかな。台湾館は廃止になって、それから沖縄館も沖縄糾弾が起きた。そういうような反動的な博覧会で、このときに明治天皇が三、四回来てるんですね。そのとき貧民窟のところを通るのは目ざわりだということで、南側（今の釜）の方に集団移動させられたという経緯がある。

あの『日本の下層社会』の横山源之助が書いた時期っていうのが、日本橋近辺のころの話です。

Q5　釜の斗いで、例えば入管斗争とか民族差別に対する斗いもあったと思うんですけれども、その辺が、いわゆる活動家グループ内部でも任務感みたいなところでおさまってしまったのか、それともある程度の大衆化が勝ちとられてきたのかっていうことを知りたいんですけれども。

風間氏　釜ヶ崎は手配師の八割か九割は在日朝鮮人です。具体的に労働者を現場で搾取・収奪している。で、その怒りが排外主義と重なった差別意識にとりこまれて、朝鮮だから悪い、といった意識が日常的に作られている。そういうことでは分断支配に乗っかってしまって、労働者階級としての斗いはできないんじゃないか、ということで『釜ヶ崎反入管通信』なんかが出されてきたんですね。内容としては花岡鉱山でいかに中国人が斗ったかということや、花岡鉱山の元請けは鹿島建設ですから、いかに悪どい会社として鹿島が戦前からあるかという内容だったんですけれども、やはり排外主義にとりこまれていくのをどう変えていって、在日朝鮮人と連帯し、朝鮮やアジアの人民と連帯していくか。それは活動家の意識としてあった……。具体的には映画会をやったり、団交なんかで差別発言が出たときにはそれを説得したりですね。そういう活動をやっていました。今でもありますけれども、僕なんかが釜に入った当時と比べると、だいぶ労働者の中にも問題意識が浸透されてきているということはいえると思うんですけれども。ただそんなに活動家のもってる意識が浸透しているとはまだいえない。で、釜共斗の中にも在日の仲間がおったんだけれども、現場斗争、たとえば人夫出しのオヤジの糾弾斗争のときに、差別発言があったことに失望してやめていった部分もあると聞いています。だからこの問題は最大の課題ではないかと思います。戦前においても、ごく一部、日朝労働者の共同斗争があるんだけれども、圧倒的に朝鮮人労働者に敵対しているという歴史がある。釜共・現斗委のころに、その辺の意識が充分に展開できたかといったら、充分できなかったというのが現実です。

Q6　七四年の一〇月ごろだったですか、釜共のエネルギーが失速状態になったと、その辺をもう少し具体的に。それとそこに表われた問題が、今の全協の中でどういうふうに内部的にされているか、方針化されているか、その辺をちょっと教えて下さい。

風間氏　オイルショック以降の仕事がなくなってきた状況の中で、行政斗争中心とした仕事保障の斗いをやるべきだと……。今月、松っちゃんなんかがおるんだけれども、七三年越冬ぐらいから、行政班というのが越冬の中にできてね。で、彼らが主要に収容所（当時はバンバン入りこめてね、労働者を組織するのに格好の場を提供してくれていた）に収容されていた労働者を組織して、それを行政にぶつけるというような斗いをやったわけです。しかし、西成分会とか全統労の時代は行政斗争が軸で、それを克服したのが釜共斗の斗いであり、現場斗争と暴動を結合させていくんだという、そういう意識が一方の部分は非常に強くて、敵の弾圧で封

じ込められてきたのをどう突破するかが問題だったのだが、行政斗争というのは改良主義だからだめだというようなところで意見が分れて、あれかこれかというような論争になっちゃったわけですね。かといって現場斗争の封じ込めの中で、新たな戦術方針を提起できるかといったら、できなかった。そういう情況なわけで、どんづまりになってきてしまった。問題意識としては、大衆的実力斗争が封じこめられたので、非公然の武装斗争が必要だと、そういう主張も出てきた。東アジア反日武装戦線のさそりのグループにいく部分がそれです。また仕事保障、行政斗争が重要課題だという主張を貫いた部分は、「釜ヶ崎仕事保障期成同盟」を作って、このころは釜共があるんだけれど、釜共全体という形ではなくて、問題意識をもった部分がやっていくということで始めて、これが釜日労の結成につながるわけです。それから行政斗争に集約されていくのは斗いの後退であるといった部分は、戦術方針を提起できないままにつぶされていってしまう。

で、現在、どう克服していくかというと、鮮明にはまだ出ていないんですけれども、八〇年代に入ってからは、一つは飯場斗争ね、半タコとケタオチ飯場。それから釜ではこの間、八〇年代から賃上げ斗争。これはセンターを中心にしての攻防になるので、現場斗争の一種といえると思います。ここで、行政からの封じこめ――特に釜は強いんだけれども――この間ずいぶん喰いやぶってきてはいる。山谷では一定、都との団交権を獲得してきているということで、今は局面によって戦術方針として〝何を要とするか〟ということは変わると思うんだけれども、現場斗争と行政斗争なりをどう有機的に結合させてやっていけるか、ということで斗っていこうと。簡単にいえばそういうことです。

山さん　それについて山谷のほうからいうと、東日労から分かれて現斗をつくるときに、東日労から分かれるという意識は全くないままやっていた。どっちかっていうと、東日労っていう組合の行動隊みたいのをつくっていこうではないかってことで、東日労とずっと話しあいをしていたんだけどうまくいかなくて、結局、組織を二つに割るような形になってしまった。そのうちだんだん東日労の組合運動よりも現斗のほうが大きくなっちゃって、組合運動のほうを全部忘れてしまう。その中で最初から出されたことでは、三つの領域のことが有機的結合を作らなきゃならないということがあった。三つの領域っていうのは、労働者にとって最低の抵抗の基盤としての組織が必要だろうということで、それはまず組合みたいな形になる。その上に上部斗争を斗える、そういうことを主目的にしたものをつくらなきゃならないんじゃないかと。あともう一つ、行動組織みたいなものをつくらなきゃということ。今は三つのうちの真中のことをやっているんではないか、そういうとこに入ってきたってことじゃないかな、と今思っている。それでワッと大衆を結集して現場斗争をやっていくほどの企画をつくったり、そこで走り回ったりしているうちはよかったんだけど、オイルショック以降、労働者が困ったときに最低の抵抗基盤をどこにおくかっていうとこが、山谷においてはできなかったっていうことじゃないかな。だから全協なんかは、その辺のことをよく考えていこうということになっている。

司会　今度の寄せ場における展望まで話がすすんでるわけですが……。

Q7　感想めいたことなんだけど、大体この時期は俺なんかは寄せ場とか関係ないところにいたんです。反七〇年代治安体制という視点からちょっと。で、ま、六〇年代は学園斗争とか何とかで元気がよかったと。そういう階級状況だったけど、その後七〇年安保斗争を目ざしての治安権力との攻防では大体おさえこまれてしまった。七〇年代は爆弾が多発して、そのあとどんどんつかまってデッチ上げもおこり、七〇年代治安体制が完備していくといわれている、寄せ場の外ではね。この時期、寄せ場といわれる山谷や釜ではまさにラディカルな大衆運動を展開していたと。かなり違うわけね。いろんな理由でそういう違いがあると思うんだけれども、そういうところで寄せ場の労働者、あるいは寄せ場をどう評価するかっていうんで、現斗時代のプロレタリア規定とかそういうことが出てくるんだろうと思うんだけれども、とにかく表面的にいうとそういうズレがある。一九七四年に「愛隣」センター爆破デッチ上げがおこって若干、交錯したところがあるんだけれどね。並木少年問題とかあったんだけれど。そういうふうなことについて考えると、それで俺たちなんかは防衛線だってことで、治安体制の中でずっとおさえこまれている中で完全にデッチ上げられてしまっておしまいになるっていうんじゃなくて、生きのびようということでシコシコと救援を一〇年ぐらいやってきたわけなんです。完全にやられっ放しでない状況はつくったと思うんだけれどね。それから、相当、無罪判決もとったんだけども、それが全体として波及していかないということがあった。そういう時期に、寄せ場ではこういう斗いがあったということを考えると、今後についても、竜さんがいわれたような、階級全体の視点の不十分性とか、そういう全体をみていくということはかなり必要だと思うんだよね。ま、ある地域、局面、ある部所では、すごいラディカルな斗争が行なわれているんだけれども、別なところではおさえこまれてる。それは別にひどくかけ離れた所にあるわけでもないのに。それは簡単にいえば、跛行的に発展しているということなんだ。それぞれの局面でたとえば自分のところでは打ちこまれているからといって落ちこまずにね、元気なところをみていく必要があるだろうし、元気のいいところでは、場合によっては落ちこんでるところもみていくっていう。そのところに、自分たちの運動の今後ないしは前史があったっていうことでみていくっていう、総合的全体的な観点はどうしてももたないといけないんじゃないか。

結局七〇年代の様々な運動――この時期、連赤もあったわけで――そういう華々しい斗いもあったわけだけど、結局おさえこまれていった。それをやったのは今の警察官僚や後藤田正晴なんかいう現内閣を作っている部分だから、彼のほうが総合性全体性を獲得していたと残念ながらいわざるをえないところがある。だから我々もあとになってもう少しみていって、それぞれの場面での突出した斗いだけでなくて、いろんな局面での抵抗や防衛といったものは相互に連絡をとっていく必要があるだろうということを、これを見て改めて痛感しました。分析もね、寄せ場のほうがそうだから当然だと思うけど、オイルショックで運動が停滞したって話が多いから、全体として治安体制が整備されていってね、

ある意味で厳しい言い方をすれば、七〇年代っていうのは、まだ寄せ場は治安管理体制の中では放置されていたわけだよね、ある意味で向うからすればね、きっと。で、その後どんどんやられてって、釜なんか地域的に全体が監視されてるっていうでしょ。テレビカメラでみられてるっていう。そういった地域保安処分体制を向うは敷いてるわけで、やっぱりさっきいったように高度成長と暴動、現在はそういうふうにはなかなか行かないから、そういう段階に応じた戦術を考えていかなくてはならないんじゃないかと思います。ちょっと抽象的だけど――。

司会　ほかにございますか、なければ時間にも制約されていて、どうも司会の不手際で十分な形の討論ができなかったんですが、一応、終りにしたいと思います。

1973.1.4.
休刊号
日刊 えっとう
ねっこう
越冬対策実行委員会内
日刊 えっとう社

倫達は団結を強め、冬を越し、闘いへ。

責任を放棄し、倫達を見殺しした市民生局に、抗議の声を！

倫達の公園での越冬打開は、夕刻まで行なわれる医療相談を続いて、今朝の炊出しでだった。昨夜ごこは、多くの働く仲間が廿に生活とたたかうことにむ。二十日から始まったパトロールは七日まで続く。

■ テントはやっぱり抜いた ■

のどじまん、ちからこぶ、ソフトボールなどやった越冬打開。夜はたき火を囲んで映画会と。それは田に対決でなく、倫達が作った正月やった。老者のあるしんは炊ぎ作らるったり、ロンパしたり、食事の用意とパトロールも、互いに助けあった。雨が降ったら、任の弱いもんにテントをゆずったり、少ない布団で交代に寝たりした。元気なもんはもう仲間のために働いた。ここで労働者が持つええ面を見てたんとちゃうやろか。手配師や暴力団は金銭づくで物事考えるけど、倫達は仲間で楽しいに生きていかなあかんと、一杯やった。このことは今後も忘れんと生かしていかなあかんやろう。

民生局は何をしたんや

倫達が苦しみ日々がら、何とか正月をすごしたとこと、いくつか気になることがあった。いちばん目に来たんは、大阪市民生局が何どもなかったことや。民生局は正月の間、倫達が困るんを知っとってほんだ。苦口があると聞いて長老者ってったら、「救世軍の厚生宿泊所」だった。こんなことやったら民生局の意味がないやないか。正月にはんでこうに入るんやったら口のばんや。それがでけへん人間がおるから民生局が言るんやないか。

倫達が行ったら、口先を抜けて、当然の義務を果たすみたいに言いやった。それが、正月になったらどこに行っても民生局の人間には会わるんだ。聞によると救世軍の宿泊所へ一人様子を見に来たとつな。

■ ヒで半にセンターで抗議集会 ■

今朝から釜公所は仕事や。このままでは暖の出がおこりそうにない。民生局の役人は、倫達が困るのを知っとって今日まで休んで、その間、倫達は仲間の寝泊り、病気の世話をやってきたんや。仲間で助けあうのは当り前のことやけど、仕事をこばるのは即これへんどうつ。休むんやったら、それなりの手を打っとかなあかんのや。

大阪市民生局に義務を果すよう抗議しよう。

倫達は黙って殺されへんぞ。

アブレ員
1.2.3と4日の分
4日に出ます。
760×4＝3.040円
人数が多いので、支給は
午前と午後になるでしょう

連載 6. 日雇い労働者のいない国

釜ヶ崎越冬ニュース

汗を流す者が主人公になること、主人公の者である。と、帰結、四畳半の部屋へ帰ってくる。資本主義社会と、帝国主義社会とを対象したら、前者は食、寝、着はみたこともなく、後者はどこじゃうにとれがいる。この差をみんなもとらなかったいか、すべて物語っていると思う。

ホテルの部屋のカギは、前者はかける必要なく、たくなく、後者はたえず盗難を心に掛けなければならない。この差が制度の違いである事を報告してこの連載を終りまる。

四手 清